

デジタル機器を活用し職員の業務負担を軽減した好事例

医療支援ピクトグラムシステムを用いた業務負担軽減の取組 【愛知厚生連海南病院】



- 社会保険関係団体（愛知県弥富市）
- 急性期機能
- 病床数540床（一般病床534床 感染病床6床）
- 職員数1118名（医師：138名、看護師：572名、医療技術職及び事務職等：408名）

【ピクトグラムシステムの導入前の状況】

- 電子カルテシステムを導入し院内の患者情報を職員間でも共有できる環境整備が整いつつあったが、排便・尿の回数、リハビリの予定などといった患者の状態等に関する最新の正確な情報を、患者のベッドサイドで即座に把握することは難しく、場合によってはナースステーションに戻り担当看護師に確認するなどの非効率が発生していた。
- 医療の質・安全の向上と、業務効率化を両立させるため、すべての医療スタッフが病室にいながら患者の最新の状態を一目で正確に把握できるよう、一覧性の高い情報整理を可能とする医療支援ピクトグラムの導入の検討を進めた。

【取組概要】

医療支援ピクトグラムシステムを導入しタイムリーな患者情報を正確に把握した取組

- 医療支援ピクトグラムシステムは、医療現場での情報共有や指示伝達を視覚的にサポートするシステムを指す。当院では電子カルテシステムと患者の床頭台に設置されているタブレット端末を連動させ、電子カルテシステムに記載されている患者情報をピクトグラム（視覚的なアイコンや図形を用いその意味概念を理解させる記号）で、職員間や患者に迅速かつ効果的に情報を共有し、以下の取組を行った。
- **正確な情報共有に関する取組**：電子カルテシステムとの連携により、患者の安静度や救護区分、禁止事項等の情報が床頭台に設置されているタブレット端末に表示され、すべての職員に情報共有できるようになったことで、入院患者に必要なケアを提供している。
- **患者及び多職種の入力に関する取組**：タブレット端末からも各種情報を入力できるようにしたことで、その場で電子カルテシステムに必要な情報を連携できるようになった。電子カルテシステムとタブレット端末の双方向で情報の入力が可能となったことで、食事量・排泄回数等は入院患者自身で入力するという患者参画による入力を実現した。



デジタル機器を活用し職員の業務負担を軽減した好事例

医療支援ピクトグラムシステムを用いた業務負担軽減の取組 【愛知厚生連海南病院】

【医療支援ピクトグラムシステムの導入に向けたプロセス】

経営層による迅速なシステム導入の検討：医療の質向上と医療従事者間の効率的な情報共有を実現するために、当時の副看護部長が主導となり、各部署と調整しながら医療支援ピクトグラムシステムの導入を進めた。

現場職員によるシステムの具体的な検討：既に導入されていた電子カルテシステムから医療支援ピクトグラムシステムにどのような情報をピクトグラムとして表示させるかや、コンテンツ関連の整備検討については、現場職員の意見を参考に具体的にシステムに落とし込みを図った。システム導入を検討する機能運用設計時には、①医療スタッフが患者の安静度や注意事項等が直感的に分かりやすくできないか、②入院患者には可能な限り積極的にタブレットを活用し食事量や排せつ回数等を記録してもらうことで、退院後に患者自身の健康状態を把握する習慣づくりができないか、③業務運用の見直しができないか、について検討を行った。

【医療支援ピクトグラムシステムの導入に向けたスケジュール】

項目	1Month	2Month	3Month	4Month	5Month	6Month	7Month	8Month	9Month	10Month
システム検討会	検討チームの組成									
	システム検討会議									
機能運用設計	運用確認									
	運用機能すり合わせ									
	検討結果まとめ									
ドキュメント作成	運用フロー作成									
	操作マニュアル作成									
ドキュメントの展開										
操作説明										
運用再確認										
テスト										
リリース										
紙運用と並行運用										

【検討チームの構成メンバー】

- 看護師：3名（副看護部長・看護課長・医療安全室長）
- コメディカル：6名（診療協同部長、検査科技師長、栄養科室長、臨床工学室長、リハビリ室長、薬剤科課長）
- 事務職：3名（企画室長・医療情報室長・施設課長）

デジタル機器を活用し職員の業務負担を軽減した好事例

医療支援ピクトグラムシステムを用いた業務負担軽減の取組 【愛知厚生連海南病院】

【医療支援ピクトグラムシステムの導入結果】

正確な情報共有による効率化～正しい情報の共有と患者に対する注意喚起～

▶ 電子カルテとの紐づけにより正しい情報の共有を実現

常に最新で正確な情報が共有されることを目的とし、電子カルテシステムと床頭台に設置されたタブレット端末の医療支援ピクトグラムシステムの情報連携を行った。これにより、電子カルテシステムに入力された患者の安静度や救護区分、禁止事項等の情報がタブレット端末にも反映され、すべての職員にその情報が共有されるようになったことで、入院患者それぞれに必要なケアの提供が可能になった。

▶ タブレットの表示による注意喚起

タブレットの表示を確認することで、転倒・転落リスクやアレルギー、看護指示等が一目で理解できるようになった。入院患者のベッドサイドで最新の正しい情報を視覚的に確認することができるため、情報確認の効率が上がり、職員間での伝達ミスや再確認の手間が削減された。

患者及び多職種の入力による情報共有の効率化～情報の双方向化実現のための他職種や患者からの入力・共有～

▶ タブレット端末から情報入力し電子カルテシステムに反映

電子カルテシステムに記載されている患者カルテの情報を一方通行で表示するだけでなく、タブレットからも情報入力を可能にすることで、入院患者の最新の状態をベッドサイドのタブレット端末から電子カルテシステムに反映できるようになった。

▶ 患者による情報の入力

患者自身に退院後も健康状態に気を付けてもらうため、食事量・排泄回数等を患者自身で入力してもらい、患者参画による情報入力を実現させた。タブレット端末を床頭台の側面に設置することで、ベッドに横たわった患者にも操作しやすいよう配慮されている。

▶ 多職種や患者の家族との情報共有

入院時の注意事項をはじめ、検査やリハビリのスケジュールや内容等を表示することで、患者のみならず、患者の家族にも状況が共有できるようになった。また、医師をはじめ、看護師や栄養士など患者の治療に携わるすべての人による情報入力と閲覧が可能のため、効率的な情報共有が実現されている。

【医療支援ピクトグラムシステムの導入に当たっての課題と課題解決方法】

情報共有の効率化に向け、入院患者ご自身に情報入力いただくようにしているものの、当院が想定しているよりもシステム入力率が低いことが課題であった。高齢者や介助が必須な患者に関しては、タブレットの操作が困難であるが、操作が可能な患者にはタブレットを積極的に活用して欲しいと考えたため、入院時のオリエンテーションの際にシステムの詳細と利用方法の丁寧で具体的な説明を行い、患者の理解を促した。

実績①：患者の医療支援ピクトグラムシステムの食事入力率

50%（令和2年5月）⇒76%（令和6年5月）

実績②：患者の医療支援ピクトグラムシステムの排尿入力率

34%（令和2年5月）⇒41%（令和6年5月）

デジタル機器を活用し職員の業務負担を軽減した好事例 医療支援ピクトグラムシステムを用いた業務負担軽減の取組 【愛知厚生連海南病院】

【医療支援ピクトグラムシステムの画面】



【医療支援ピクトグラムシステム】



<転倒転落リスク>



<アレルギー>



<安静度>

デジタル機器を活用し職員の業務負担を軽減した好事例 医療支援ピクトグラムシステムを用いた業務負担軽減の取組 【愛知厚生連海南病院】

【医療支援ピクトグラムシステムで表示するコンテンツ】

患者名 海南 太郎

食事量 排便量 排尿量

排便回数記録 排便状態記録

	日時	回数	KSC	点数	下血	摘便	排便量
前日合計	*	2	*	14	なし	なし	0
<u>当日合計</u>	*	5	*	12	なし	なし	0
直前明細	01/23 15:26	*	-	0	なし	なし	0

入院患者様・ご家族以外のご使用はご遠慮下さい。

✓ 排泄情報を入院患者に入力してもらい、医師・看護師が確認することで、効率的に便の状態変化を把握することに繋がっている。

患者名 海南 太郎

食事量 排便量 排尿量

食事量記録

		朝	昼	夜
前日	ごはん	-	割	- 割
	おかず	-	割	- 割
<u>当日</u>	ごはん	-	割 4.0	割
	おかず	-	割 10.0	割

入院患者様・ご家族以外のご使用はご遠慮下さい。

✓ 食事量を入院患者に入力してもらい、医師・看護師が確認することで、付随情報の確認や食事変更の相談に繋がっている。

デジタル機器を活用し職員の業務負担を軽減した好事例 医療支援ピクトグラムシステムを用いた業務負担軽減の取組 【愛知厚生連海南病院】

【現場職員の声】



看護師

正しい情報を効率的に把握することが可能に。医療の安全と質を保つ意味でも有効

入院患者の正しい情報を確認するために、その都度ナースステーションまで戻り確認することが多々ありました。このシステムを導入してからは、看護職員のみならず、その他の医療職にも情報共有が可能になり、様々な専門性を持った医療職の目線で情報の整合性も確保できています。常に最新の情報が更新され続けており、それを患者のベッドサイドで確認できるため、非常に効率的です。また、入院患者もタブレットを見ることができるので、患者自身の状態を把握できて安心するという声をいただいています。

回診の際の情報収集で役に立っている

回診の際PCを持ち歩かずに、患者のベッドサイドから排便回数や食事量等を確認できます。担当患者の状態が一目で確認できるため、非常に役立っています。



消化器内科
医師



NST
管理栄養士

容易に患者状態の把握が可能

便の性状を、文字で記録するだけでなく、最も近い状態の写真を選んで記録することが可能になったことで、リアルタイムの患者の状態を容易に把握でき、経管栄養の変更を検討する等情報を活用しています。